

科目名	言語療法特論				授業の種類	演習	講師名		
授業回数	30回	時間数	60時間 (2単位)	配当学年・時期	言語聴覚士科4年			必修・選択	必修
〔授業の目的・ねらい〕									
音声障害、運動障害性構音障害、器質性構音障害、摂食嚥下障害の定義、症状、リハビリテーションについて学び、専門臨床実習で実践し、国家試験に対応できる知識をつけることを目指す。									
〔授業全体の内容の概要〕									
これまで学んできた音声障害、運動障害性構音障害、器質性構音障害、摂食嚥下障害について、座学および検査、訓練実技を行い専門臨床実習で実践でき、国家試験に対応できることを目指す内容となっている。									
〔講師の実務経験〕									
〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕									
音声障害、運動障害性構音障害、器質性構音障害、摂食嚥下障害の定義、症状、リハビリテーションについて学び、専門臨床実習で実践し、国家試験に対応できる知識をつけること。									
回数	講義内容								
1	発声発語器官の解剖、顎関節の構造、呼吸機能が理解できる。								
2	声の機能と発声の物理的特性、発声の生理とその調整が理解できる。								
3	音声障害、音声の検査、評価、訓練が理解できる。								
4	無喉頭音声、気管切開について理解できる。								
5	運動障害性構音障害のタイプ分類、評価、訓練が理解できる。								
6	運動障害性構音障害を引き起こす疾患について理解できる。								
7	器質性構音障害のタイプ分類、評価、訓練及び関わる切除皮弁が理解できる。								
8	摂食嚥下のモデル及び、咀嚼運動に関わる筋の機能と神経支配が理解できる。								
9	嚥下に関わる筋の機能と神経支配が理解できる。								
10	嚥下に関わる筋の機能と神経支配が説明できる。								
11	摂食嚥下障害の簡易検査、嚥下内視鏡、嚥下造影検査の方法、目的の違いが理解できる。								
12	摂食嚥下障害に対する代表的な間接・直接訓練が理解できる。								
13	発声発語器官の解剖、呼吸機能、音声障害、無喉頭音声のまとめ								
14	運動障害性構音障害、器質性構音障害のまとめ								
15	摂食嚥下障害のまとめ								
16	発声発語器官の解剖、顎関節の構造、呼吸機能の復習								
17	音声障害、音声の検査、評価、訓練、無喉頭音声、気管切開の復習								
18	運動障害性構音障害のタイプ分類、評価、訓練についての復習								
19	器質性構音障害のタイプ分類、評価、訓練及び関わる切除皮弁についての復習								
20	摂食嚥下のモデル及び、咀嚼運動に関わる筋の機能と神経支配についての復習								
21	摂食嚥下障害の簡易検査、嚥下内視鏡、嚥下造影検査の方法、目的についての復習								
22	摂食嚥下障害に対する代表的な間接・直接訓練についての復習								
23	運動障害性構音障害を引き起こす疾患についての復習								
24	摂食嚥下障害を引き起こす疾患についての復習								
25	口腔、咽頭、顎関節の構造についての復習								
26	歯科・口腔外科に関連する疾患を理解する。								
27	喉頭、気管、食道に関わる疾患、手術を理解する。								
28	呼吸機能、音声障害の総復習								
29	運動障害性構音障害、器質性構音障害の総復習								
30	摂食嚥下障害の総復習								
【 準備学習・時間外学習 】									
【 使用テキスト 】									
書籍名			著者名			出版社			
言語聴覚士テキスト 第3版			大森孝一ほか			医歯薬出版株式会社			
病気がみえるvol13耳鼻咽喉科第1版			堤剛ほか			メディックメディア			
【 単位認定の方法及び基準（試験やレポート評価基準など） 】									
試験の結果を100点満点として成績を評価する。試験は定期試験のみ実施とし、60点以上の場合に科目を認定する。									